

# 主役は人形なのか、人なのか？

かしなが まさお  
檀永 真佐夫

民博 研究戦略センター



無形の文化遺産の代表とされる芸能。その上演は、毎回、さまざまな条件に影響される。ベトナムでは、文化遺産の指定そのものが芸能を大きく変えた。

## 廃止されたサービス

タンロン水上人形劇場はハノイの代表的な観光地である。かつてはチケットを買い、カセットテープ（二〇〇〇年ごろか、CDにかわった）と扇子



現在タンロン水上人形劇では、民俗楽器に代わってドラムも用いられている

がお土産についてきたものだ。カセットには舞台演奏や台詞が録音されていて、扇子には劇の一場面のような村の牧歌的光景が、劇場の宣伝とともに分厚い手漉きの粗い紙に印刷されていた。二〇一二年に五、六年ぶりに劇場を訪ねると、そのサービスは廃止されていた。公演内容も驚くほど変わっていた。

## 皇城の世界遺産認定

変わったのは二〇一〇年だった。ちょうどこの年、ハノイは遷都千年祭の歓喜に沸いていた。

歴史を遡ると、漢代以来千年にわたって中国支配下にあった紅河デルタの住民が独立王朝を築いたのが九三八年。都が紅河デルタ南縁に近いホアルーから、一〇〇キロ離れたデルタ中心のハノイへ北遷されたのが、二〇一〇年のことだった。以来、阮朝（一八〇二―一九四五）期にフエに都が移るまで、ハノイにある昇竜皇城で歴代皇帝は執務した。皇城の遺跡群は、遷都千年を記念する年にユネスコの世界遺産に認定され、祝賀に花を添えた。これと軌を一にして、タンロンへ昇

竜）水上人形劇場でも公演内容が一新されたのである。

## 紅河デルタの千年

それにしても、水上人形劇があるのだろうか。代表的な観光地という理由もさることながら、じつはハノイを都に定めた李朝（一〇〇九―一二二五）とちゃんど縁があるのだ。

水上人形劇では、池のなかにたてられた水亭の簾のむこうから人形遣いが腰まで水につかって操る人形たちが、楽団の演奏

にあわせて物語や踊りを水上で演じる。雨乞いともかわる民衆娯楽として、紅河デルタのいくつかの村で継承されてきた。その最古の記録がハノイ市の南方五〇キロに位置する龍隊山（標高七二メートル）に、李朝皇帝仁宗による碑文（一一二一年）のなかに残る。

劇はこのうえない娯楽だったにちがいない。約九百年前の碑文は、仙人の舞、水を噴く神亀など、現在のものに近い演目があったこと、年に三回の上演が定着していたことも記している。推するに、劇の発生はもと舌い。恵みをもたらすかと思えば容易に牙もむく水そのものが舞台装置をなす水上人形劇は、おそらくデルタ千年の生活を映している。

## 国民の劇場から

## 外国人の劇場へ

現在タンロン水上人形劇場では、約四〇分間の公演が毎日六、七回おこなわれている。一九九二年から二〇一〇年までと比べると、公演回数が増えたかわりに、公演時間は短くなり、演目も一七から一一へと減った。

演目を見ると、科挙の進士が故郷に錦を飾る行列、中国明朝による一時的支配をくつがえし一五世紀に黎明を建てた黎利が宝剣を神亀に返還した伝説と

いった歴史物が消滅した。釣りや野良仕事など生業の演目も減った。いっぽうで祭り太鼓、闘牛、競馬、御輿など村の祭礼や娯楽の演目が増えた。いずれも物語性に乏しいが、民俗情緒に富み、中国から見れば謀反人の歴史英雄も登場しない。電子楽器も加わったテンポのいい音楽にのって、次々と演目が消化されていくので、ことばがわからなくても退屈しない。もともとベトナム戦争中の一九六九年に、ホーチミン主席の指示で国民に娯楽を供するために設立された劇場だが、今では観客の大

部分が外国人なのである。演目が変わっただけではない。演奏者や人形遣いの登場と退場はショーアップされ、つまり芸能の伝承者はもはや人形の裏方ではなくなった。伝承者が目の見なければ、人形たちはイチジクの木偶に化すかもしれない。だから伝承者の保護と育成を政府は支援し、かつ公演ではベトナムらしさが世界にむけてアピールされる。前々からベトナムでは、ユネスコの世界文化遺産としての登録が切望されているのだ。そしてそれは遠くない将来、実現されるのではなからうか。



軽くて水に強いイチジクの木で彫られた人形を、簾の向こう側から人形遣いが操る



タンロン水上人形劇場付近の土産物屋で、すでに役目を終えた人形が売られていることも